

# 『雨月物語』の「連環」構想を中心として

西 田 汐 里

はじめに

『雨月物語』は江戸中期に刊行された五卷九篇の怪奇小説から成る短編物語集である。作者は上田秋成。構成は序から以下卷之一「白峯」、「菊花の約」、卷之二「浅茅が宿」、「夢応の鯉魚」、卷之三「仏法僧」、「吉備津の釜」、卷之四「蛇性の姪」、卷之五「青頭巾」、「貧福論」から成る。

各篇では、人間と悪霊の議論や、鯉への変身など、様々な怪異が発生し物語の中心となる。これらの怪異現象は全て独立しており、一見すると『雨月物語』は九篇の短編を集めた物語集のように思われる。しかし私は、野田寿雄夫氏の『評注 雨月物語全訳』（注二）中の、序文に書かれている年は後に仮構して付けた年ではないかという考えを受け、作者である秋成が、物語を執筆し始めた年に演出を加えて拘っているのならば、物語の構成にも拘りがあるのではないかという点に興味を抱いた。そこで、物語各篇が成立した順番通りに記載されているのか、それとも何らかの意図に沿った構成がなされているのかを調べるため、高田衛氏の研究（「連環」）を参照しつつ、物語全体の構成の意図を探ることを本研究の目的とした。

使用テキストは以下の通りである。また、本資料における強

調・省略は西田によるものとする。

中村幸彦 高田衛 中村博保 校注・訳 『新編 日本古典文学全集78 英草子 西山物語 雨月物語 春雨物語』（小学館 二〇〇三年七月二〇日）

## 1、『雨月物語』における「連環」論

はじめに九篇の物語を様々な観点から考察し、各篇の共通点・相違点を明らかにして構成の意図を探る。

### 観点① 時間と場所

『雨月物語』では現在の年号や地名が使用されており、このことから物語中の怪異現象は実際に起こった出来事を基にしているのではないかと考えた。物語中の怪異現象が発生したと思われる時期を年表形式にまとめた結果、物語各篇が記載されている順番と物語中の怪異事件が起こった順番は一致せず、『雨月物語』は編年体で書かれている史実書とは異なるものであるということが読み取れる。

## 観点② 登場人物の関係性

感情をもつものの、感情の対象、感情の強さと内容を一覧にした表を作成したが、感情の強さと内容は、人によって解釈が異なる、また、これらは変化するため一言で表すことはできないなどの課題が挙げられるため、まずは登場人物の関係性のみをまとめ、感情の変化と強さについては、改めて詳しく考察を行う。登場人物の関係性のみに着目して表にまとめた例を挙げると、次の表・一のようなになる。

表・一 三者（感情をもつものの、感情の対象、怪異体験者）の関係まとめ（一部抜粋）

物語	感情をもつもの (A)	感情の対象 (B)	怪異体験者 (C)	AとCの 面識	BとCの 一致
①白峯	崇徳院	後白河天皇 平清盛	西行法師	無	×
②菊花の約	宗右衛門	左門	左門	有	○
④夢応の鯉魚	興義	夢応の鯉魚 (絵)	興義	一致	×

## 観点② (一) 直接・間接・特殊

感情をもつものの(A)、Aの感情の対象(B)、怪異体験をした者(C)の関係性について以下の規準を定め、それに従って各篇を分類すると以下のようなになる。

## 規準

- ・感情が原因で、怪異的存在へと変身している
- ・その感情の対象が、怪異体験者となっている(BとCが一致する)



「直接」

(怪異体験をした者に、怪異の原因がある)

- ・感情が原因で、怪異的存在へと変身している
- ・感情をもつものの(A)と怪異体験者(C)の面識がなく、感情の対象と怪異体験者が異なる(BとCが一致しない)



「間接」

(怪異体験をした者に、怪異の原因は無い)

- ・感情をもつものが、怪異を受動的に体験している
- A || C、または表に欠如がある

「特殊」

(直接にも間接にも当てはまらない)

## 分類

①白峯	間接	
②菊花の約	直接	
③浅茅が宿	直接	
④夢応の鯉魚	特殊	
⑤仏法僧	特殊	
⑥古備津の釜	直接	
⑦蛇性の姪	直接	
⑧青頭巾	間接	
⑨貧福論	特殊	

直接分類の物語は、中心となる人物同士が直接関わり合い感情に変化が起る。また怪異体験を通して、特定の相手のみに感情を訴えかけるという分かりやすい構成になっている。

間接分類の物語は、感情の対象と怪異体験者が別に存在するため、怪異体験をする者が、ある条件を満たした特定の人物でなくてはならないのかという疑問を抱いた。感情をもつ者、感情の対象者、怪異体験者の関係性と、怪異現象の因果関係を人物以外の視点で考えなくてはならないので、直接分類より物語構成がやや複雑な印象を抱く。

特殊分類の物語は、感情の対象や登場人物同士の関係が曖昧で、他分類の篇と比較して感情と怪異現象の関係性が希薄であるという特徴がある。また、感情をもつものが受動的に怪異体験をしている、感情の対象が不明であるなどの点においても、直接・間接分類と全く異なる性質をもっている。

## 観点②(二) 執着

怪異の存在の執着の対象を考察した結果、執着の対象は人間である場合が最も多いことが分る。執着の対象が人間以外で

あったのは、④「夢応の鯉魚」、⑤「仏法僧」、⑨「貧福論」の三篇であり、この三篇は、観点②(一)で特殊分類とした物語と一致するため、執着の対象が人間ではないことが、特殊分類の個性の一つと考えられる。また、これらの篇は特殊分類の特徴と同じく、執着と怪異現象の因果関係が他篇と比べ弱いという印象を受ける。さらに、人間に執着している物語の篇と比較すると、①対象に執着する理由が本文に明記されていない、②本文の記述から、対象に対して強い感情を抱いている印象を受けない、③執着している対象から受ける影響が少なく、一方的・単調に物語が進行するなどの相違点がある。

## 観点②(三) 因果と偶発

物語各篇の執着対象を考察してみると、対象に対して強い感情を抱いておらず、感情が原因で怪異現象が発生した可能性が低いのではないかとと思われる物語が見られたため、そのような篇では、作中の登場人物ならば誰にでも怪異現象が起りうるのではないかという疑問を抱いた。そこで池田弥三郎氏の意見(注二)から物語中の人物関係、怪異の存在が出現した場所という二つの観点を得て考察を行った結果、怪異現象と人物関係の因果関係が強い物語は、観点②(一)で直接分類とした篇と一致することが分る。次に、怪異的存在が出現した場所の観点から因果関係を考察する。場所的な因果関係があると考えられる根拠として、埋葬地や霊場など、怪異的存在が特別な思いを抱く場所であるという点を挙げ考察を行った結果、怪異現象と場所的な因果関係が強い物語は、③「浅茅が宿」を除いて、

間接分類、若しくは特殊分類に該当していることが分かる。しかし、特殊分類の一つである⑨「貧福論」のみは、人物關係的因果關係、場所的因果關係共に強いと思われるものが見られなかったため、怪異現象と主人公が黄金に敬意を払って大切にしていたという人物像の因果關係を考えることとする。まとめる以下のようになる。また、重複して該当しているものは複数の因果關係が強いと考える。

人物關係的因果關係が強い物語

- ②「菊花の約」、③「浅茅が宿」、⑥「吉備津の釜」、⑦「蛇性の姪」

場所的因果關係が強い物語

- ①「白峯」、③「浅茅が宿」、④「夢応の鯉魚」、⑤「仏法僧」、⑧「青頭巾」

人物像的因果關係が強い物語

- ④「夢応の鯉魚」、⑨「貧福論」

以上の点から、人物的因果關係が弱く誰にでも偶発的に起こりやすいように見える怪異現象には、場所的因果關係や人物像的因果關係が強く關係していると読み取ることができる。特殊分類の物語に対して感じた曖昧さの原因の一つに、怪異現象が誰にでも偶発的に起こりやすいように見えるという点が挙げられるのではないかと考える。

観点③ 怪異現象の内容

『雨月物語』では、人間と怪異的存在の議論や、異界の者との遭遇などの、怪異現象が物語の中核を担っている。このような怪異現象の内容に着目して、各篇を比較しまとめる以下のようになり、よく似た怪異現象が起る物語が連続していることが読み取れる。

①白峯

議論

②菊花の約

再会の約束を果たす

③浅茅が宿

再会の約束を果たす

④夢応の鯉魚

異界の者への変身

⑤仏法僧

異界の者との遭遇

⑥吉備津の釜

男を呪い殺す

⑦蛇性の姪

男にとり憑く

⑧青頭巾

議論

⑨貧福論

議論

怪異現象の連関性について高田衛氏は、『新編 日本古典文学全集78 英草子 西山物語 雨月物語 春雨物語』(注三)で次のように述べており、高田氏の「連環」研究を図で表すと、次の図・一のようになる。 ↓ 図・一参照

『雨月物語』は先行作品とはまた違った独自の世界を創り上げているのだが、それではその独自性は具体的にどこに求めらるうのか。

それは、『雨月物語』九編によって形成される世界の、異様な幻妖性として指摘できるだろう。しかし、『雨月物語』各編は、それぞれ独立したモチーフを持ち、独立した短編であった。同時にこの九編の連関性が、各編の独立性を超えて『雨月物語』という全体的な独自の文学世界を織り上げていることを見逃してはならないだろう。(頁603～604)

高田氏は、『雨月物語』は九篇の短編小説を集めた作品であると同時に、秋成が考えた一つの連環的構想に従って執筆、推敲された作品であると考えている。本研究では高田氏の「連環」研究に沿って考察を行うので、九篇の物語は記載されている順番通りに書かれたと考える。

さらにここで、①直接・間接・特殊、②執着の対象、③因果と偶発の三つ観点に基づいて分類した項目をまとめ、高田氏の「連環」構想に沿って図で表すと、次の図・二のようになる。図・二から、直接分類同士、間接・特殊分類同士の物語が隣り合い、関係を強めあっていると考えることができる。 ↓ 図・二 参照

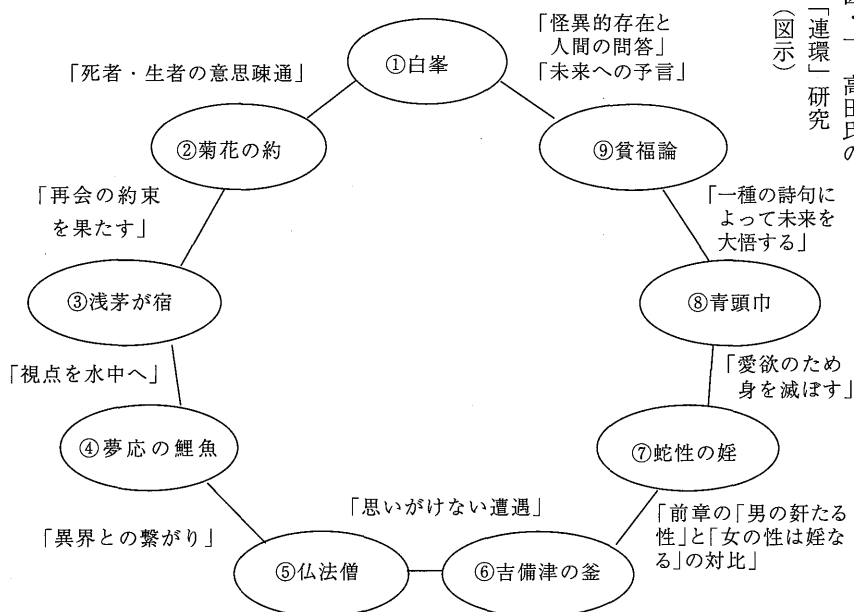
高田氏の「連環」構成(図・一)は九つの篇が等しい強さで関連し合っているのに対し、独自の分類項目から作成した「連環」構成(図・二)は九つの篇をいくつかのグループに分け、グループ内では強く関連し合っているが、グループ同士の関連は弱いものであるということが分かった。二つの「連環」構成

を重ね合わせると、次の図・三のようになる。 ↓ 図・三 参照

図・三の白色領域は高田氏の「連環」構成のみに関連が見られることを表し、黑色領域は高田氏の「連環」構成と独自の項目から作成した「連環」構成の両方に、それぞれ異なった関連が見られることを表している。黑色領域には二種類の関連が見られるため、白色領域と比較して強い関連があると考えることができる。以上の点から、高田氏の「連環」研究に、各篇を他の観点から考察し分類した項目を合わせて考えることにより、物語同士の関連の強さを加えて考察ことができるという結果となった。

図・一 高田氏の

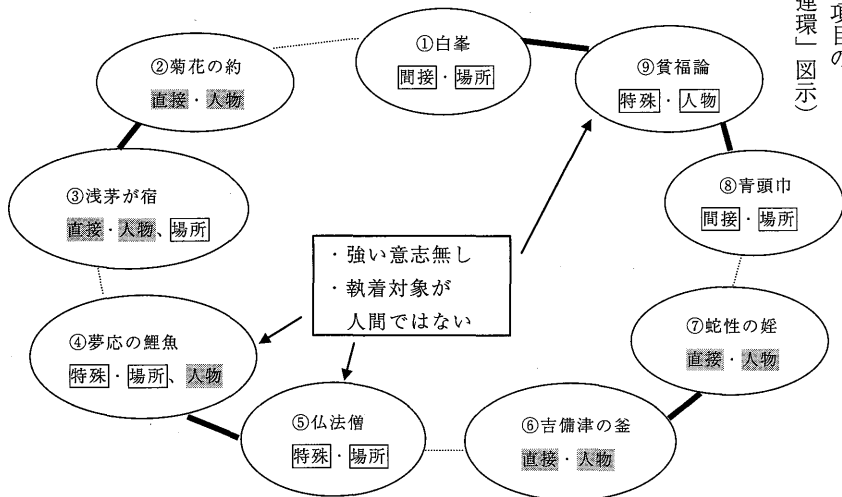
「連環」研究  
(図示)



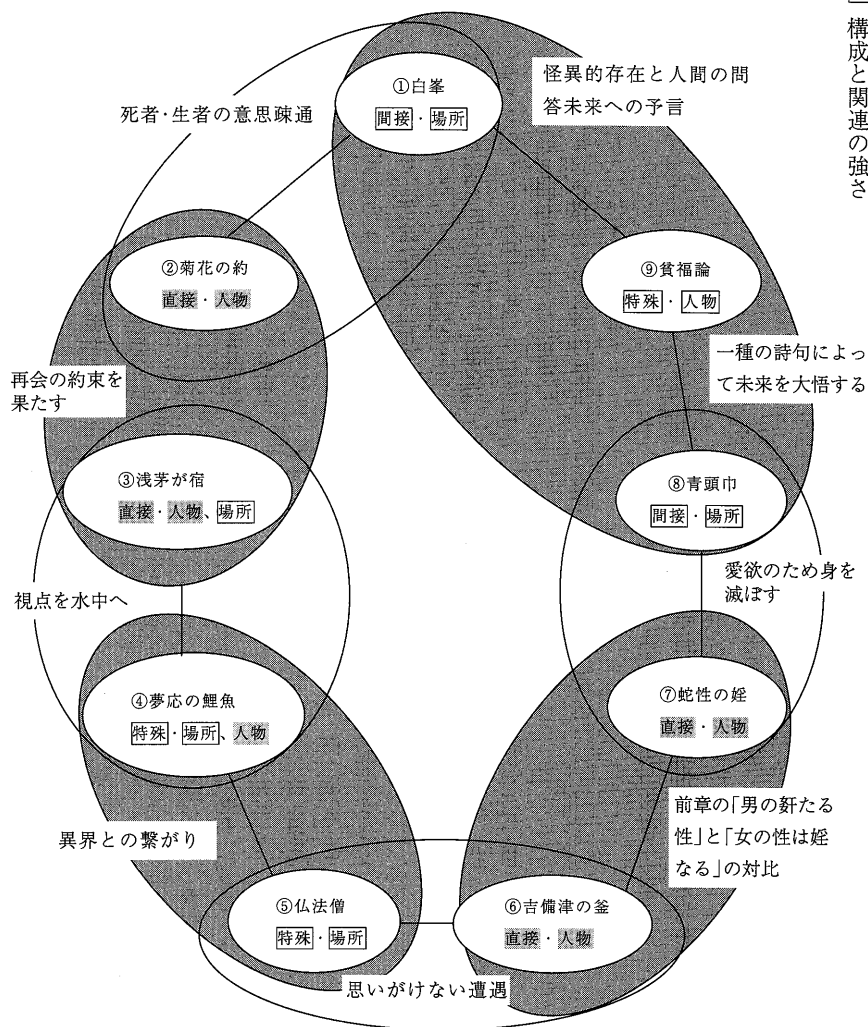
図・二 分類項目の

まとめ「連環」図示

※直接 = 怪異体験者に怪異の原因あり      間接 = 怪異体験者に怪異の原因なし  
 ※人物 = 怪異と人物関係の因果が強い      場所 = 怪異と場所の因果が強い  
 人物像 = 怪異と人物像の因果が強い



※直接 = 怪異体験者に怪異の原因あり  
 間接 = 怪異体験者に怪異の原因なし  
 ※人物 = 怪異の人物関係の因果が強い  
 場所 = 怪異の場所的因果が強い  
 人物像 = 怪異と人物像的因果が強い



## 2、物語各篇の流れ

次に、登場人物の感情の変化に着目して物語各篇の流れをまとめ、構成の意図を探る。

### 感情の変化

感情変化の考察は、感情をもつ者・感情の対象者・怪異体験者を対象とする。登場人物ごとにテクストの本文に沿って感情の変化を追い、感情が変化したと考えられる本文を根拠として挙げ、変化した感情を単語、または短文で表し一覧表を作成する。また、ここでは登場人物の感情の変化のみに着目し、感情を抱いている対象については考慮しない。例えばある登場人物がAという人物に好意を抱いていたとする。しかし物語が進み、Bという人物に対して憎しみの感情を抱くようになった場合、登場人物の感情は好意→憎しみと変化したこととする。さらに感情の変化が起こったと考えられるにも関わらず本文に記述が無い場合、登場人物の動作を参照する。各篇の登場人物の感情変化を一覧にした例を挙げると次の表・二のようになる。

表・二 「浅茅が宿」 主な登場人物の感情の変化

感情をもつもの	感情の内容と本文根拠
勝四郎	イ、無念↓ロ、喜び↓ハ、意気込む↓ニ、心配↓ホ、落胆↓ヘ、好意に甘える↓ト、自責↓チ、嬉しがる↓リ、期待↓ヌ、動転・喜び↓ル、驚き呆れる↓ヲ、悲しがる↓ワ、恐ろしい、慕わしい↓カ、悲しがる↓ヨ、情けなく思う↓タ、喜び↓レ、感謝する↓ソ、傷心
宮本	ツ、気にかける↓レ、心細い、別れが辛い↓ナ、不安↓ラ、怨めしい、悲しい、落胆↓ム、恐ろしい↓ウ、怨めしい、悲しい、喜び

※本文根拠は省略とする

物語各篇の、主な登場人物の感情の変化を表した表を比較し考察すると、物語によって感情が変化する回数に大きな違いが見られることが分かる。⑦「蛇性の姪」では、怪異体験者である豊雄には二〇回の感情の変化が見られ、怪異的存在である真女児には十一回の感情の変化が見られたのに対し、⑨「貧福論」では、怪異体験者である岡佐内には五回、怪異的存在である金貨の精霊には二回の感情の変化が見られた。



次に、一篇の物語を通して登場人物が抱く感情がどのように変化しているか詳しく考察するため、作成した表を基にグラフを作成する。グラフ作成にあたっていくつかの条件を設け、条

件に基づいてグラフを作成した例を挙げると次の図・四のようになる。

#### ※使用したグラフ作成条件

・グラフは縦軸を感情のプラス・マイナス、横軸を物語の流れ（時間軸）とし、グラフ下部に物語中の出来事を示す。

#### 感情の内容について

・喜び・好意などの感情をプラス（左上がり）、悲しみ・怒りなどの感情をマイナス（左下がり）とする。また、グラフはプラス、マイナスが明らかな感情を中心として作成し、判断しかねる感情（仇打ちを誓う、好意に甘える、自らを戒める、など）は、グラフの縦軸であるプラス、マイナスには反映させない。

#### グラフの時間軸について

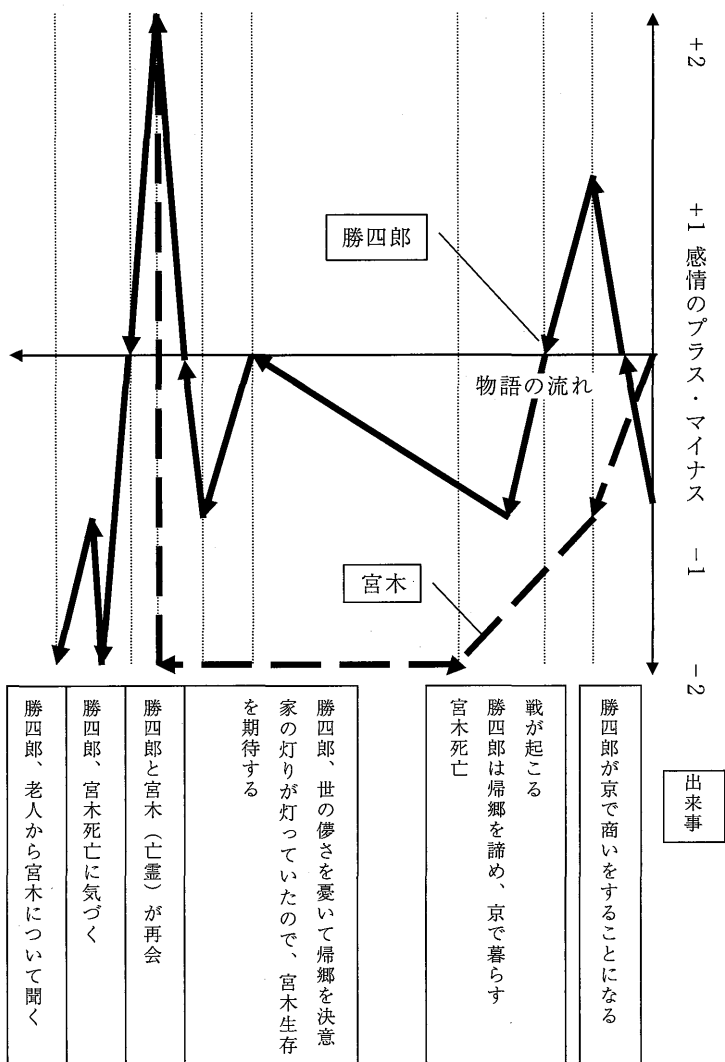
・ここでは変化の内容や大きさについて調べるので、おおよその時間軸で考える。

#### 感情の大きさについて

・感情のプラス、マイナスを表す縦軸には、上から、＋Ⅱ、＋Ⅰ、－Ⅰ、－Ⅱの数値を振る。感情がプラスの最大である＋Ⅱになるためには、本文中に、強調表現が見られる、涙を流す描写がある、上記のいずれかを満たすことを条件とする。また、マイナスの最大である－Ⅱになるためには、本文中に、強調表現が見られる、涙を流す描写がある、生命に関わっている、上記のいずれかを満たすことを条件とする。それ以外の、特に強調されていない本文での感情の変化は、プラス、マイナスともに－とする。

・変化は、グラフの現在値を考慮しないこととする。例えば、－Ⅰの感情となっている時に、＋Ⅱの感情変化の条件を満たしている本文が出てきた場合、グラフの値は＋Ⅰではなく＋Ⅱになるとする。さらに、－Ⅰの感情を示す文が続けて登場している場合、グラフの値は時間軸と並行にして表すこととする。

図・四 登場人物の感情の変化（浅茅が宿）



グラフを作成する過程で感情を表す矢印の数や、感情の大きさを客観的に表す方法など多くの課題が挙げられたが、本研究

では感情は登場人物と関わり変化しているということを示すため、参考として感情グラフを用いることとする。

作成した物語各篇の感情グラフから、九篇の物語を通して、死者・または物語中で死者となる怪異的存在は、マイナスの感情を抱いている期間が長いことが分かる。さらに感情を変化させる回数も少なく、生者である怪異体験者の方が、より豊かに感情を変化させている場合が多いことが分かる。しかしこでも、特殊分類の物語はこれらの共通点には当てはまらず、『雨月物語』作中での特異性をさらに強めていると読み取ることができる。

### 「連環」論との関係

作成したグラフを用いて、物語終盤の感情の変化とそれに伴う物語終末の印象を考察し、さらに物語の終末は次篇の物語にどのような効果をもたらしているのか、「連環」論と関連させて考察していく。

グラフ上の感情変化の幅に着目した結果、物語終盤で一度感情が大きくプラスの値に変化してから一気にマイナスの値へ変化する人物がいる物語があると読み取ることができる。例えば③「浅茅が宿」では、主人公である勝四郎が既に死亡していると諦めていた妻に思いがけず再会することができ喜びの涙を流すが、翌朝にそれは亡霊であったことに気づいてひどく悲しみ嘆くという構成となっている。もし勝四郎が妻の亡霊に会わなければ、その悲しみはそれほどまでに深くならなかったと推測することができる。このように一度登場人物の感情をプラス値にすることで、読者に物語の結末が良いものになると予想させる。しかし同時に、もの寂しい情景描写や怪異的存在がもつ強

すぎる魅力は、話が上手く出来すぎているという違和感を抱かせることになる。最後に物語が大きく展開した時、登場人物の感情は一気にマイナス値となり、物語終末の哀れな印象を一層引き立てる効果をもたらすとともに、読者の違和感是不気味さへ変わるのではないかと考える。このような構成の物語は五篇あり、①「白峯」以外は直接分類に属している。このような物語構成も、直接分類の物語に感じる強い感情や、執着の裏付ける判断材料になるのではないかと考える。

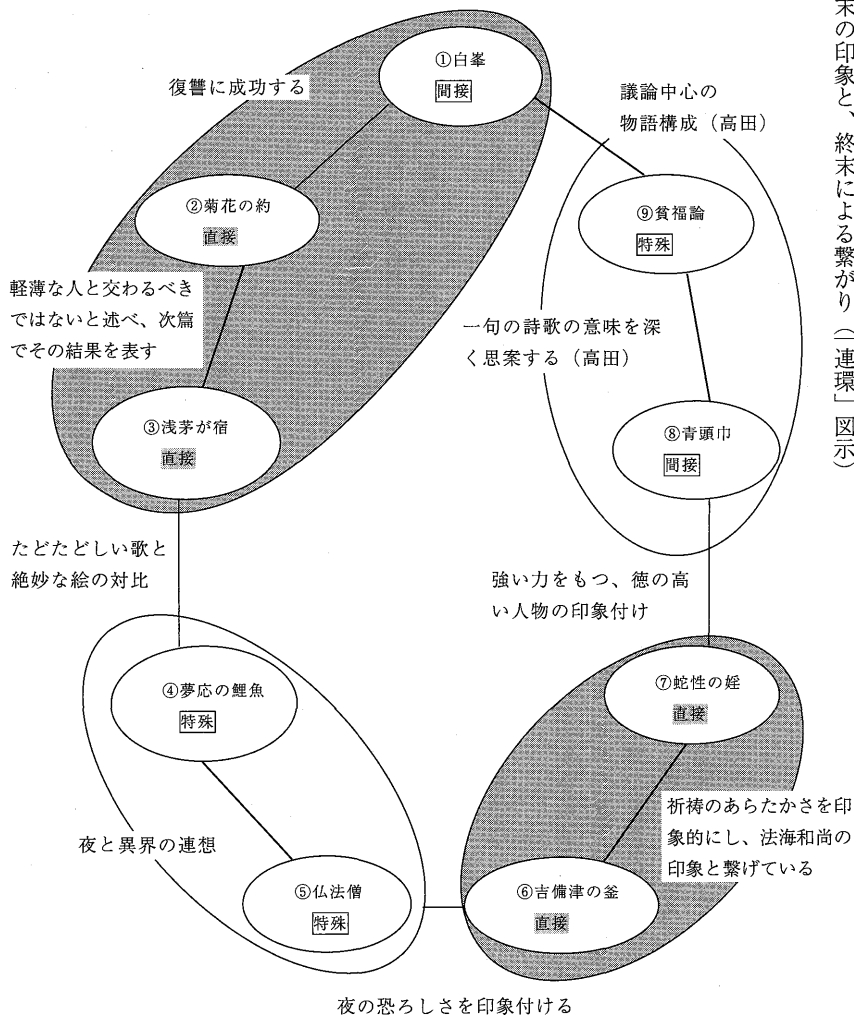
その他の四篇は、物語終盤の感情の値がプラスへ変化したり、大きくマイナスへと変化していなかったりする物語である。これらの物語終末の印象は、哀れさや不気味さよりも、不思議さが際立つものが多く、前者の物語終末とは全く異なるものであると考えることができる。またこの四篇はいずれも間接分類か特殊分類に属しており、物語の終末という観点からみても分類を強めることができる。

次に、物語終末が次篇に与える効果について考察した結果、物語終末が次篇の内容や登場人物を連想させていると捉えることができる。次篇と繋がる要素を見つけることができるという点において、「連環」論と性質が似通っていると考えることができる。物語終末の印象と、物語の終末による繋がりを「連環」図で表してみると、次の図・五のようになる。

↓ 図・五参照

図・五 物語終末の印象と、終末による繋がり〔連環〕図示

※黒色領域 プラスからマイナスへの大きな変化有り  
 ※白色領域 プラスへの変化有り、またはマイナスへの大きな変化なし



図・五から、物語の終末という観点からも、『雨月物語』の「連環」的な構成を考えることができる。このことから、『雨月物語』の魅力の一つである登場人物の複雑な感情は、物語終末の印象に大きく関わっており、その終末は、次篇の導入的な役割を果たすことによって、物語間の繋がりを強める効果があるのではないかと考察する。ここで、高田氏の「連環」構成（図・二）と、独自の分類項目から作成した「連環」構成（図・二）の考えを用いると、九篇が等しい強さで関連し合っているという点で、終末による繋がりは高田氏の「連環」構成を、九篇をグループ化し繋がりを強めるという点で、終末の印象は独自の分類項目から作成した「連環」構成をそれぞれ強める判断材料になるのではないかと考える。

### 3、作者が作品に与えた影響

最後に、魅力的な登場人物を生み出した作者・上田秋成の人物像と、秋成の人物像が『雨月物語』に与えた影響について考察を行う。

重友穀氏は、『雨月物語』に登場する多種多様な怪異的存在は、秋成が不可思議な存在を強く信じるようになった影響があると、『日本古典全書 上田秋成集』（注四）で述べている。また彼は、不遇の経験を経て、反抗的な性格や、社会に対する孤独感や疎外感を形成した。そのことが『雨月物語』各篇の終末から感じられる哀しさに表れているのではないかと考察する。さらに、彼の本質は純粋であり、その思いが、登場人物が抱く強い感情となつて『雨月物語』に表れていると考える。また、『雨

月物語』には多くの出典や引用があり、秋成の知識が豊かなものであったことが読み取れる。

おわりに

以上、『雨月物語』を「連環」・人物像・感情の三つの観点から考察した結果、長年多くの人々を惹きつけている『雨月物語』には、「連環」構成の秘密や、様々な感情を抱き複雑に変化させあう登場人物など、多くの魅力があることを知った。また、このような物語構成や、多種多様な怪異的存在、生々しく負の感情を抱く登場人物が生み出された背景には、作者・上田秋成の生い立ちや人間関係、豊富な知識が深く関係していると考察した。

今回の考察を通して『雨月物語』についてより深く知ることができ、さらに魅力的な物語の世界にふれることができた。感情の研究を始めとして根柢が薄く主観的になつた部分も多くあったため、今後も多くの先行研究や書物から知識を得て、豊かに古典文学の世界を読み解く力を身につけたい。

・ 脚注

（注一） 野田寿雄 『評註 雨月物語全訳』 武蔵野書院

（注二） 池田弥三郎 『雨月の怪異』 （一九六三年十月十五日） 頁九～十

（注三） 池田弥三郎 『雨月の怪異』

『日本古典評釈全注釈叢書月報10 雨月物語評釈』

（一九六九年三月） 頁二～三

(注三) 中村幸彦 高田衛 中村博保

『英草子 西山物語 雨月物語 春雨物語』 小学館

(二〇〇三年七月二〇日) 頁六〇三～六〇四

(注四) 重友毅

『日本古典全書 「上田秋成集」』 朝日新聞社

(一九五七年二月十五日)

参考文献

辻森秀雄 『日本古典全書 附録 「上田秋成集」』

日本文学研究資料刊行会 『日本文学研究資料叢書 秋成』

有精堂出版株式会社 (一九七二年三月一日)

(平成二十四年度修了生)